

編集後記

わが国の PT・OT の歴史について特集号を組んだ。これ迄にいろいろな立場の方が、この 2 職種の誕生について「外来の血が混っている」とか「純粹に日本製である」とか主張されていた。前者の場合には明治 20 年代の軍医の橋本乗晃によって医療マッサージが、明治 34 年呉秀三がドイツ留学から帰国して手や足革を取り除いて裁縫などをさせることで移入したのが始まりのようである。そのまま大正を過ぎ第二次大戦終戦後、昭和 24 年に小池文英先生、また水野祥太郎先生が海外に出られて欧米の身体障害者のリハビリテーションを視察され、より広義の治療理念と技術を日本で発達させる努力をなされた。昭和 38 年に清瀬の地に養成校を建て厚生省は外人講師で教育を始めた。

後者の場合には 11 世紀に京都岩倉村の大雲寺へ皇女の奇行を治すために送り、観世音に祈ることで病気を治すことができ、以来時の権力者（皇族、武士、富裕な町人など）の親族が岩倉村にいき、住民の家の離れに分散して住みながら大雲寺で祈ったり、水ごおりをとったという。

時代の変遷を通して法的身分のこと、養成校のこと、実践場面での実状などを歴史の証人として書いて頂いた。お一人一人の言に感想を述べた上でお礼をいいたいと思う。読者は今までの出生の秘密を知ったような、心の薄膜のはがれた思いをなきることであろう。その意味においてよい企画であったし、第 1 回懸賞論文が載ったのも記念にすべきことと思う。

しかし一番大切なことは「これから何故、何をどうしていくのか」ということではなからうか。

もしリハビリテーションの定義をいうならば「人として生れたらどんな形、姿、心理状態、行動などに癖があったとしても、その状態のままでも 1 人の人間として尊敬され周りの支持、助言、環境の整備によって、本人の自主性や努力によって人間として開花し、生きていることを喜べる人生を創りあげていくこと。助言者とはその人の発達期と必要に応じて両親、教師、医療従事者、社会福祉関係者、友人、知人、地域の人々などである」としたら理想的にはリハビリテーションの理念が土台にあり、そこから生まれた専門職（PT・OT だけではなく ST、ケースワーカー、臨床心理士、義肢適合士他）がいて分化した高度の技術を用いながらも協調し統合した対応をできることを意味することであろう。

PT・OT が自らの職種の中だけに眼を向けていくのか、個人が誰でも人として生を享受し生き甲斐を発散させながら過せる世の中を作る努力に指向するのか、大きな決断を迫られている昭和 51 年ともいえる。

丁度この日の朝日新聞の「ひと」欄に弓道日本一の太田勝正氏が載った。その中で「人より優れたものを持ちたかった。パラリンピックには出たいと思いません。五体満足な人と一緒にやりたい」といわれた氏はせきついカリエスで 120 ㎝の身長とのことである。身身の障害者が別々にグループを作ってその中にいることや金力、権力、偶然のチャンスの力をもった人だけが受療したり、職種が主体性を叫んだりするのはまだ本当のリハビリテーション開花の時代はないのだとつくづく思った。（鈴木明子）

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院長

五 味 重 春
府中リハビリ学院長

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院長

津 山 直 一
東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
川崎医科大学学長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
都養育院リハビリ部

佐 藤 馨
神奈川リハセンター

鈴 木 明 子
府中リハビリ学院

谷 岡 淳
自治医科大学

田 村 美枝子
清瀬リハビリ学院

寺 山 久美子
都心障センター

松 村 秋
都養育院リハビリ部

<編集同人>

明 石 謙

大 井 淑 雄

大 川 嗣 雄

大 橋 博

鎌 倉 矩 子

紀 伊 克 昌

小 林 夏 子

駒 沢 治 夫

佐 藤 剛

田 原 澄 彦

富 岡 詔 子

奈 良 勲

藤 沢 しげ子

藤 本 欽 也

前 田 守

松 本 妙 子

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

横 山 巖

和 才 嘉 昭

(担当 細田・松橋)